

# 目次

序 i／はじめに iii／表記について x

## 序章 考察の目的、対象、理論的枠組み、構成 1

1. 考察の目的	1
2. 考察対象	1
3. 理論的枠組み	2
4. 本書の構成	3

## 第1章 先行研究の検討と語用論的考察の必要性 5

1.1. 先行研究の批判的検討	5
1.1.1. 先行研究概観	5
1.1.1.1. 二重判断説 5／1.1.1.2. 説明説 5／1.1.1.3. 客体化説 6	
／1.1.1.4. 既定命題説 8／1.1.1.5. 内実・背後の事情説 9／1.1.1.6.	
関連づけ説 10／1.1.1.7. 多機能説 10	
1.1.2. 先行研究の問題点	11
1.1.2.1. 二重判断説の問題点 11／1.1.2.2. 説明説の問題点 12／	
1.1.2.3. 客体化説の問題点 12／1.1.2.4. 既定命題説の問題点 12／	
1.1.2.5. 内実・背後の事情説の問題点 13／1.1.2.6. 関連づけ説の問	
題点 13／1.1.2.7. 多機能説の問題点 14	
1.1.3. 問題点の整理と今後の方向	14
1.2. 語用論的考察の根拠	16
1.2.1. 語用論の考え方	16
1.2.1.1. 語用論の研究対象と目的 16／1.2.1.2. 文と発話 16	
1.2.2. ノダを語用論的観点から考察する根拠	17
1.3. 1章のまとめ	19

## 第2章 関連性理論 20

2.1. 関連性理論の有益性	20
2.2. 関連性理論概説	21
2.2.1. 文脈(context)	21
2.2.2. 関連性(relevance)	22

2.2.3. 文脈効果(contextual effect) .....	23
2.2.4. 最適な関連性(optimal relevance) .....	27
2.2.5. 関連性の原則(principle of relevance) .....	28
2.2.6. 表意(explicature) .....	29
2.2.7. 高次表意(higher level explicature) .....	31
2.2.8. 推意(implicature) .....	32
2.2.9. 概念的意味(conceptual meaning)と手続き的意味(procedural meaning) .....	35
2.2.10. 本稿における「関連づけ」の定義 .....	36
<b>2.3. 関連性理論とノダ研究</b> .....	<b>39</b>
2.3.1. 関連性理論に基づくノダ研究 .....	39
2.3.2. 問題点 .....	42
<b>2.4. 2章のまとめ</b> .....	<b>45</b>

### 第3章 仮説提出のための理論的考察 46

<b>3.1. ノダの持つ「手続き的意味」</b> .....	<b>46</b>
3.1.1. 各レベルにおける「手続き的意味」 .....	46
3.1.1.1. 表意レベル 46	
3.1.1.1.1. 文脈効果そのものを提示する場合 46/3.1.1.1.2. 文脈 効果の一部を提示する場合 47	
3.1.1.2. 推意レベル 49/3.1.1.3. 高次表意レベル 52	
3.1.2. ノダの持つ「手続き的意味」の限界 .....	57
3.1.2.1. ノダの使用選択 57	
3.1.2.1.1. ノダの使用選択に関する問題点 57/3.1.2.1.2. ノダが 必要ではない場合 59/3.1.2.1.3. ノダが必要となる場合 60	
3.1.2.2. 手続き的意味の限界 61	
3.1.3. 3.1のまとめ .....	62
<b>3.2. 「既定性」分析の限界</b> .....	<b>63</b>
3.2.1. 「既定性」に替わる新たな考察視点の必要性 .....	63
3.2.2. 先行研究とその問題点 .....	64
3.2.2.1. 既定性の定義 64/3.2.2.2. 問題点 67	
3.2.3. 「文脈」という考察視点の提案 .....	69
3.2.4. 文脈の改変と既定性 .....	71
3.2.4.1. 文脈の改変と既定性の関係 71/3.2.4.2. 文脈の改変とノダ	

の使用との関係	72
3.2.5. 3.2のまとめ	74
<b>3.3. ノダが提示する命題の特徴</b>	<b>74</b>
3.3.1. 先行研究と本書の考え方	74
3.3.2. 「解釈」という観点からの分析可能性	75
3.3.2.1. 「解釈」の定義	75
3.3.2.2. 事態を描写すること	75
3.3.2.3. 発話や思考を解釈すること	78
3.3.3. 「解釈」の内実	79
3.3.3.1. 仮説の提出	80
3.3.3.2. 仮説の検証	83
3.3.3.2.1. 話し手の先行発話を解釈する場合	83
3.3.3.2.2. 聞き手の先行発話を解釈する場合	87
3.3.3.2.3. 二事態間の関係を解釈する場合	89
3.3.4. 利点	93
3.3.4.1. 「関連（関係）づけ」	93
3.3.4.2. ノダ文の持つニュアンス	94
3.3.4.3. 情報の「共有・未共有」	97
3.3.5. 3.3のまとめ	101
<b>3.4. 3章のまとめ</b>	<b>101</b>

## 第4章 表意の復元とノダ 103

<b>4.1. 「発見のノダ文」</b>	<b>103</b>
4.1.1. 先行研究とその問題点	103
4.1.1.1. 先行研究概観	104
4.1.1.2. 先行研究の問題点	105
4.1.2. 考察の枠組み	107
4.1.2.1. 文脈の改変	107
4.1.2.2. 解釈的用法 (interpretive use)	108
4.1.3. 記述的考察	110
4.1.3.1. 諸特徴の記述	110
4.1.3.2. 利点	114
4.1.3.3. 「発見のノダ文」の位置づけ	117
4.1.3.3.1. 「発見のノダ」の機能	117
4.1.3.3.2. 「発見のノダ文」と「説明のノダ文」との連続	122
4.1.4. 「情報の受信・受容を表すノカ文」	124
4.1.4.1. 先行研究概観	124
4.1.4.2. 先行研究の問題点	127
4.1.4.3. 考察	130
4.1.4.4. 「発見のノダ文」との関係	134
4.1.5. 4.1のまとめ	137

4.2. 「説明のノダ文」—因果関係を中心に—	138
4.2.1. 先行研究とその問題点	138
4.2.1.1. 先行研究概観	138/4.2.1.2. 先行研究の問題点 139/
4.2.1.3. 考察視点	141
4.2.2. 理論的考察	144
4.2.3. 記述的考察	148
4.2.3.1. 原因・理由の提示とノダ	148/4.2.3.2. 根拠の提示とノダ
4.2.3.3. カラと共起するノダ	152/4.2.3.4. 因果関係以外の
4.2.3.5. 因果関係の伝達とノダ	156/
4.2.3.6. 「説明のノダ」の機能の普遍性	160
4.2.3.6.1. 「語り文」におけるノダ	160/4.2.3.6.2. 「論述文」に
4.2.3.6.2. 「論述文」におけるノダ	163
4.2.4. 「説明のモダリティ」再考	167
4.2.4.1. 「確信・推量のモダリティ」とノダ	167/4.2.4.2. 「疑いの
4.2.4.2. 「疑いのモダリティ」とノダ	172
4.2.5. 4.2のまとめ	174
4.3. 4章のまとめ	176
<b>第5章 高次表意の復元とノダ</b>	<b>177</b>
5.1. 「命令・決意・忠告・願望のノダ文」	177
5.1.1. 先行研究とその問題点	177
5.1.1.1. 先行研究概観	177/5.1.1.2. 先行研究の問題点 180/
5.1.1.3. 考察視点	183
5.1.2. 関連性理論の命令文分析	183
5.1.2.1. Wilson and Sperber(1988a)	183/5.1.2.2. ノダ命令文と
5.1.2.2. ノダ命令文と関連性理論の命令文分析	185
5.1.3. 理論的考察	186
5.1.3.1. ノダ命令文と解釈的用法	186/5.1.3.2. ノダ命令文が提示
5.1.3.2. ノダ命令文が提示する「解釈」	187/5.1.3.3. ノダ命令文と他のノダ文との共通性
5.1.3.3. ノダ命令文と他のノダ文との共通性	189/5.1.3.4. 利点 192/5.1.3.5. 理論的考察のまとめ 197
5.1.3.4. 利点	192/5.1.3.5. 理論的考察のまとめ 197
5.1.3.5. 理論的考察のまとめ	197
5.1.4. 記述的考察	197
5.1.4.1. 「命令のノダ文」	198/5.1.4.2. 「決意のノダ文」 203/
5.1.4.2. 「決意のノダ文」	203/
5.1.4.3. 「忠告のノダ文」	210/5.1.4.4. 「願望のノダ文」 212
5.1.4.4. 「願望のノダ文」	212
5.1.5. 5.1のまとめ	215

5.2. いわゆる「強調のノダ文」	218
5.2.1. 先行研究とその問題点	218
5.2.1.1. 先行研究概 218／5.2.1.2. 先行研究の問題点 223	
5.2.2. 理論的考察	228
5.2.2.1. 「念押しのノダ文」と「一方的提示のノダ文」	228
5.2.2.1.1. 「念押しのノダ文」 228／5.2.2.1.2. 「一方的提示のノダ文」 230／5.2.2.1.3. 「念押しのノダ文」と「一方的提示のノダ文」との連続 236	
5.2.2.2. 利点 238	
5.2.3. 記述的考察	240
5.2.3.1. 「念押しのノダ文」	240
5.2.3.1.1. 「念押しのノダ文」と関連性 240／5.2.3.1.2. 「念押しのノダ文」と「名詞ノダ文」	241
5.2.3.2. 「一方的提示のノダ文」	243
5.2.3.2.1. 「一方的提示のノダ文」と関連性 243／5.2.3.2.2. 高次表意復元に関与する条件 244	
5.2.4. 他のノダ文との連続	249
5.2.4.1. 「説明のノダ文」との連続 249／5.2.4.2. 「倒置のノダ文」との連続 252／5.2.4.3. 「前置きのノダ文」との連続 254／5.2.4.4. 「推意のノダ文」との連続 255	
5.2.5. 5.2のまとめ	257
5.3 5章のまとめ	258
<b>第6章 推意の復元とノダ</b>	<b>259</b>
6.1. 先行研究とその問題点	259
6.1.1. 関連性理論における推意の位置づけ	259
6.1.2. 先行研究概観	262
6.1.3. 先行研究の問題点	266
6.2. 理論的考察	270
6.2.1. 理論的枠組みの提案	270
6.2.2. 理論的枠組みの検証	272
6.3. 記述的考察	275
6.3.1. 「推意のノダ文」による伝達	275
6.3.1.1. 推意前提確定コスト 275／6.3.1.2. 推意前提確定コストと	

ノダ 277	
6.3.2. 「推意のノダ文」による伝達の諸相	282
6.3.2.1. 推意前提の言語化	282／6.3.2.2. 推意の言語化 285／
6.3.2.3. 「推意のノダ文」と「表意のノダ文」との連続	287／6.3.2.4. 推意と表意の融合 291／6.3.2.5. 「推意のノダ」と名詞文 294
6.4. 6章のまとめ	296
<b>第7章 フィードバック 297</b>	
7.1. 包括的記述の可能性	297
7.2. 「関連づけ」とノダ	301
<b>第8章 結語と今後の課題 305</b>	
8.1. 結語	305
8.2. 今後の課題	306
出典	308
参考文献	309
索引	320

# 序章 考察の目的, 対象, 理論的枠組み, 構成

## 1. 考察の目的

ノダはこれまで多くの研究者によって考察されてきた。しかし、その本質的な機能は未だ完全には明らかにされていないように見受けられる。今、ノダ研究において求められるものは、これまでのノダ研究で記述されてきた様々な表面的諸機能の包括的な説明を可能とする本質的な機能の記述と、それに基づく個別的な用法の再記述である。そのためには、まずこれまでのノダ研究を可能な限り網羅的に俯瞰し、その到達点と解決されていない問題点を明らかにする必要がある。そして、各々の先行研究が依って立つ理論的枠組みについても再検討し、その有効性についても再検討する必要がある。

そこで本書では、ノダを語用論的視点<sup>1</sup>から考察し、ノダの本質的な機能や表面的な諸用法について再考察を行うことを目的とする。

## 2. 考察対象

本書では基本的にノダのみをその考察の対象とし、ノカ、ノデハナイ、ノダッタ、ノダカラ、ノナラ等については直接の考察対象とはしない。これは、網羅的記述を将来的な目標とした上で、その出発点として、まずノダという特定の形式に関するより詳細な記述を目標とするためである。これは、本書が語用論的観点からノダについて考察するという考察方法を用いることとも関係する。より汎用性のある理論を構築し、今後における他形式の研究へと発展させるため、最も基本となる形式であるノダの考察に限定するということである。

このことは逆に言うと、相対的に見て、これまでの先行研究において通常のノダとは別の枠組みで考察されがちであった用法(たとえば、「あれ、こんなところに店があったんだ」のようないわゆる「発見のノダ文」)や、周辺の、または例外的位置づけを受けてきた用法(たとえば、「さあ、立つんだ」のようないわゆる「命令のノダ文」や「駄目といたら駄目なんです」のような「強調のノダ文」等)を包括的に記述するための、より積極的により詳細な考察を行うことを意味する。また、名詞にノダを後接させた「私、学生なんです」のような「名詞ノダ文」も考察対象とし、主に「強調のノダ文」との関係で取り上げる。ノダロウ、ノカについても「説明のノダ文」との関係で触れる<sup>2</sup>。

考察の手がかりとしては、主に実例を使用する。収集にあたっては、文体や

---

<sup>1</sup> 特に3で触れる関連性理論が中心となる。

<sup>2</sup> 紙幅の関係もあり、「らしい」、「ようだ」、「にちがいない」、「そうだ(伝聞)」等のモダリティ形式に後接するノダについては考察対象外とする。

使用域による偏りを避けるべく、極力幅広い媒体から収集することを心掛けた。具体的には、話し言葉の媒体と書き言葉の媒体、及びその中間的であると言える Web サイト・掲示板等のインターネット媒体から収集した。また、硬い文体が使用される媒体とくだけた文体が使用される媒体の双方から収集した。使用したのは、映画やテレビドラマのシナリオ、テレビ・ラジオ番組の録画・録音を文字化した資料、小説、新聞、雑誌、広告等である。文学作品と新聞記事に関しては電子化されたテキストも利用した。それに加え、自然に産出された用例として、筆者が収集した実話や筆者宛の電子メールの文章も用いた。また、必要に応じて作例も用いた。例文の出典に関する情報は巻末に記載する。

ここで以後の考察における言語形式に関する表記について説明する。本書では抽象的なメタ言語として言及する際に「ノダ」という表記を用い、ノダを用いた文・発話については「ノダ文」という表記を用いる(注。鍵括弧は用いない)。つまり、ノダという表記は「の」、「んだ」、「のです」、「んです」、「のである」等の変異形を含む総称として用いる。同様の意味で「ノダ形式」という語を用いる場合もある。それに対し、例文等で使用されている具体的な形式に言及する場合は平仮名で「のだ」や「んです」と表記する。また、考察中でノダの異形態に言及する場合があるが、この場合も上に述べた表記で区別を行う。

### 3. 理論的枠組み

本書は、Sperber and Wilson(1986a)(1995)をその中心とするいわゆる「関連性理論(relevance theory)」において提唱されているいくつかの知見を、その理論的枠組みとして採用する。その詳しい理論については2章で概観するが、その理論は現時点の語用論研究において最も先端を行くものであり、聞き手の発話解釈過程を最も合理的に説明しうる理論である、と考えられている<sup>3</sup>。

先に述べたように、本書はノダの考察において語用論的観点に立つものである。このことは、聞き手によるノダ文の発話解釈過程を考察することを通じて、ノダを考察することを意味する。本書が関連性理論をその理論的枠組みとして援用するのは、関連性理論が本書の考察目的と手法に最も合致し、その結果、

<sup>3</sup> 田窪(1999:x)は関連性理論について「この理論は文脈と発話理解との関係の非常によい見通しを与えてくれるだけでなく、-以下後略-」と述べている。また、金水(2000:159)は「関連性理論は、単に理論としてコミュニケーションの新しい見方を提示するというだけでなく、特定の語や、語の特定の形態の機能を説明するための有効な視点を提供してくれる。ことに日本語に関しては、関連性理論を適用することによって新しい観察や説明ができそうであり、有望な研究方法の一つであると言える」と述べている。今井(2001)はその前書きで「関連性理論こそが、人間の認知の深奥を探る研究プログラムの一部を成す、真の語用論だと信ずる」と述べている。このような記述から見て、関連性理論の有効性・潜在的可能性は広く認められていると言えよう。



## 第1章 先行研究の検討と語用論的考察の必要性

本章では、ノダの本質を論じている先行研究<sup>1</sup>をその考察視点ごとに類型化して概観し、それらの研究の到達点と未解決の課題を明らかにする。そして、それらの課題に回答を与えるためには語用論の考察視点を導入することが有益であると考えられることを述べる。

### 1.1. 先行研究の批判的検討

#### 1.1.1. 先行研究概観

##### 1.1.1.1. 二重判断説

国立国語研究所(1951:174)では、ノダが「根拠のある説明，理由の提出，回想，二重判断，強調などの意を表わす」と述べている。

林(1964:284-286)は「ダは、動詞・形容詞の終止形と、同じ肯定判断を示すはたらきをもつとみなしてよいであろう」、「ノは、いったん判断された内容を、もう一度なんらかの判断材料にするためのはたらき、いわば、客体化、概念化のはたらきをする」、「ノ(ダ)は、かくて、二重判断の第二次の判断にあずかる。しかしかという判断(の内容・事実)が成立する、という判断に関係する」と述べている。また、「ノ(ダ)は、説明用、説得用のことばである。現実描写ではなくて、現場の事実について根拠とか理由とかを述べる。またその場のないことを相手にわからせようとする」と述べている。

##### 1.1.1.2. 説明説<sup>2</sup>

Alfonso(1966:405)は“the presence of NO DESU adds certain overtones of the statement, for it indicates some EXPLANATION, either of what was said or done, or will be said or done, and as such always suggests some context or situation”と述べている。

久野(1973:143-149)は、『ノデス』は、話し手が先に言ったこと、したこと、あるいは、話し手の状態(元気がないとか、外出の身支度をしているとか)に対する話し手の説明を与える」と述べている。また、「疑問形『ノデスカ』は、話し手が見たこと聞いたことに対する聞き手の説明を求めるのに用いられる」と述べている。更に、ノダとカラの異同にも触れ、「ノデス」は説明を、「カラ

<sup>1</sup> ノダに関する先行研究は非常に多く、ここでその全てに言及することは紙幅の関係もあり困難である。よって、ノダの本質を論じているもので、しばしば引用され代表的であると思われるもの、本書に直接的に関係するものを中心に取り上げることとする。

<sup>2</sup> 「説明」の内実については田中(1980)でも考察されている。

## 第2章 関連性理論

本章では、まず、関連性理論そのものについて概観する。その後で、関連性理論の枠組みでもってノダの分析を行っている先行研究を取り上げ、その論考を概観し、本書が具体的な記述の土台となる理論的枠組みを構築するにあたり取り組むべき課題について述べる。

### 2.1. 関連性理論の有益性

Sperber and Wilson(1986a)(1995)を中心としたいわゆる「関連性理論」は人間の普遍的な認知システムに関する研究であり、ある特定の言語研究の範囲に留まるものではない。しかし、普遍的な理論は個別的事象の分析においても有益な分析の枠組みとして機能すると考えられる。本書では、関連性理論が以下に述べる理由からノダの研究に有効な理論的枠組みであると考え<sup>1</sup>。

まず第一に、理論の汎用性が挙げられる。先に述べたように、関連性理論は言語研究の範囲に留まるものではなく、人間の普遍的な認知システムに関する総合的な研究を基に構築された理論である。このことは、関連性理論があらゆる言語研究に適用可能であるということであり、ある特定の言語形式の記述にも有効な枠組みとして機能する可能性を持つと考えられる<sup>2</sup>。

第二に、ノダ研究との間に共通点が存在することが挙げられる。ノダ文を記述するには、先行文脈や状況との結びつきを考慮する必要があることが先行研究において述べられているが、その「結びつき」の内実は必ずしも明確に記述されているとは言えない。しかし、人が「先行文脈や状況」とノダ文が提示する命題との間に「関連がある」と認める場合その判断はいかにして行われるのか、を記述するためには関連性理論の知見が援用できるものと思われる。

第三に、関連性理論の知見がいくつかの術語を明確に定義する理論的拠りどころとなる点が挙げられる。「関連性」や「関連」といった語は日常生活でも頻繁に用いられるものであるが、その内実はかなり曖昧であると言える。したがって、そのような術語を明確な定義なくして言語理論の記述に用いるとすれば、理論の理解に混乱を来す恐れがある。一方、関連性理論はそのような混乱を避けるべく術語の定義を厳格に行っている。したがって、そのような定義づ

1 本書では関連性理論に関する他の研究として、Blakemore(1987)や Carston(1988)等を参照する。

2 このことは、具体的な研究成果は省略するが、関連性理論は様々な言語の様々な言語事象分析に応用され、研究成果を挙げていることから確かめられる。その研究成果については、巻末の参考文献や *UCL working papers, Lingua 90* 等を参照のこと。

## 第3章 仮説提出のための理論的考察

1～2章で指摘した問題点を解決する枠組みを構築するため、3章では理論的な考察を行う<sup>1</sup>。3.1ではノダを「手続き的意味」の観点から再検討し<sup>2</sup>、ノダが先行研究で指摘された「高次表意」への関与だけではなく「表意」「推意」レベルにおいても聞き手の発話解釈を制約する、という手続き的意味を有することを確認する。3.2では、ノダの持つ「既定性」という特徴を関連性理論の知見を取り入れた立場から捉え直し、手続き的意味という考察視点をを用いれば先行研究の問題点の一つである既定性分析の問題点を解決することが可能となることを論じ、「表意」、「推意」、「高次表意」の順でノダ文の手続き的意味を考察する。3.3ではノダが提示する命題が「事態や客体化された命題(コト)として」ではなく「ある先行発話や思考」に対する「聞き手側から見た解釈として」提示されている、と考えられることを論じる。

### 3.1. ノダの持つ「手続き的意味」

#### 3.1.1. 各レベルにおける「手続き的意味」

##### 3.1.1.1. 表意レベル

##### 3.1.1.1.1. 文脈効果そのものを提示する場合

ノダが文脈含意を提示しているとするれば、ノダ文を受けて聞き手はいかなる関連づけも行う必要はないはずである。確かに、そのような場合が存在する。たとえば、「どこ」、「いつ」、「誰」、「何」等の疑問詞を用いたノカ質問文に対する回答を行う場合である。

- (1) A: どこへ行くんですか。  
B: 東京へ行くんです。／東京です。
- (2) A: いつ行くんですか。  
B: 来週の金曜日に行くんです。／来週の金曜日です。
- (3) A: 誰と行くんですか。  
B: 一人で行くんです。／一人です。
- (4) A: 何で行くんですか。  
B: 夜行バスで行くんです。／夜行バスです。

発話に先立ち、(1)～(4)の A は、何らかの言語的・非言語的情報を知覚し、

<sup>1</sup> 3章では各節において各々独立した例文番号を付すこととする。

<sup>2</sup> ノダが使用されていても関連性が見出せず、結果的に当該ノダ文が許容されなくなる場合もある。3.1 ではそれらの例も取り上げ、ノダの持つ「手続き的意味」の限界についても考察する。

## 第4章 表意の復元とノダ

(1) (2)<sup>1</sup>のようなノダ文は従来「既定命題」という観点から考察されてきた。

(1) あ、雨が降ってるんだ。 (野田(1997:79) (91))

(2) (なくしていたと思っていた傘を見つけたとき)

なんだ、こんなところにあったんだ。 (庵他(2000:273) (4))

一方、本書は3.2で既定性分析の問題点と限界を示した。そこで4.1では(1)(2)のような「発見のノダ文」<sup>2</sup>を「文脈の改変」、「聞き手側から見た解釈としての提示」という観点から考察する。そして「発見のノダ文」は周延的なものではなく、「客体化された話し手」を聞き手として「知覚した事態に対する話し手の認識(思考)」を「聞き手側から見た解釈として」「意図的に、かつ、意図明示的に」提示する、という機能を持ち、他のノダと共通の意味・機能の枠組みで捉えうることを論ずる<sup>3</sup>。

4.2では「説明のノダ文」を3.3.3.1で提出した仮説に基づいて考察し、ノダの使用が聞き手の発話解釈を制約する機能を持つことを確認する。そして聞き手がその発話解釈の過程において、「提示された命題」が「聞き手側から見た解釈として」十分な関連性を持ちうるような「命題間の統合的關係」を導き出すと考えられることを事例の分析を通じて示し、ノダ文が表すと考えられてきた「先行状況や発話との間の因果關係」は、ノダによって明示的に表されるものではなく、聞き手の発話解釈過程において語用論的推論を経て復元されるものであると結論づける。仮にノダが「説明」という機能を持つとすれば、それは「話し手や第三者の思考」を「聞き手側から見た解釈として」提示するという「抽象的な説明」であり、「因果關係」「継起」といった「具体的な『命題間の統合的關係』」を表すことではないと考えられる。それらは聞き手が復元するものであってノダによって「説明」されるものではない、ということである。

### 4.1. 「発見のノダ文」

#### 4.1.1. 先行研究とその問題点

<sup>1</sup> 4.1, 4.2では構成の關係上、各節において各々独立した例文番号を付す。

<sup>2</sup> 「発見」という名称は吉田(1988a)で用いられているものである。

<sup>3</sup> 庵他(2000:271)でも「『のだ』文は状況に対する話し手の解釈を表します」と述べ、ノダが話し手の解釈を表すことが指摘されている。庵他(2000)でいうその「解釈」とは例文から判断すると、「状況から推論すること」を意味するものと思われる。しかし、解釈を提示するだけであれば、ノダは必須ではない。また、庵他(2000)はこの解釈用法を「理由」「言い換え」「発見」と同列に扱っている。それらの考えと本書との異同については適宜論じていく。

## 第5章 高次表意の復元とノダ

ノダ文には一般的に「命令」、「忠告」、「強調」といった意味で用いられているとされる用法がある<sup>1</sup>。しかし、これらのノダはどちらかという周辺的な用法として位置づけられていたり、他のノダ文分析の枠組みを用いてやや強引に説明されているように感じられたりすることが多く、「説明」や「因果関係」といった他のノダの用法と比べると、それほど詳しく考察されているとは言えない。また、これらの用法に言及している先行研究の論考にも、いくつかの点で問題があると考えられる。そこで5.1では「命令・決意・忠告・願望のノダ文」を論じ、そのような発話解釈が、あくまでも語用論的推論による発話解釈過程において生じることを示す。5.2では「強調のノダ文」を取り上げ、いわゆる「強調のノダ文」を「念押しのノダ文」と「一方的提示のノダ文」とに区別するべきであることを論じ、「強調」という発話解釈についても語用論的推論による発話解釈過程において生じるものであることを示す<sup>2</sup>。

### 5.1. 「命令・決意・忠告・願望のノダ文」

#### 5.1.1. 先行研究とその問題点

##### 5.1.1.1. 先行研究概観

山口(1975:22)は、「…のは…のだ」をノダ文の基本形とし、(1)について「自分ガドアヲ開イタトイウコトハオ前ガ帰ル(ベキダ)トイウコトダ」、(2)については「自分ガコノヨウナ動作ヲスルトイウコトハ自分ガドウシテモ今日イクトイウコトダ」と言っていることであると述べている。

(1) (ある人がドアを開きながら)お前はもう帰るのだ。 (p.22)

(2) (ある人がすくっと立ち上がるとかその他決然とした態度をとりながら) ぼくはどうしても今日行くのだ。 (p.22)

一方、堀口(1985)は、山口(1975)を次のように批判している。

このような考えは、先行文のない場合は<現実の事態>がその代わりに

<sup>1</sup> たとえば、吉田(1988a)を参照。本書では「命令」、「忠告」、「願望」等の区別をつけない場合にはそれらの総称として「ノダ命令文」という語を用い、発語内行為の力に言及する場合には、「命令のノダ文」、「決意のノダ文」、「忠告のノダ文」、「願望のノダ文」という語を用いることとする。なお、「忠告のノダ文」には「(論文を書けるかなと心配する聞き手に)自信を持つんだ」のようなノダ文を含み、「願望のノダ文」にも「(危篤の患者に家族が)がんばるんだ」のようなノダ文を含む。これらのノダ文は共に「激励」とも言えるものであるが、本書の段階ではそれらを区別しないものとする。

<sup>2</sup> 5章は5.1と5.2から構成される。その構成の関係上、各節において各々独立した例文番号を付す。

## 第6章 推意の復元とノダ

本章で「推意のノダ文」として取り上げるのは、質問に対する間接的な回答・応答<sup>1</sup>を行う際に用いられる(1)のようなノダ文である。

(1) 勧誘者：スカイパーフェクトテレビの御案内なんですが。

男：うち、あんまりテレビ見ませんので。

勧誘者：野球とかサッカーとか御覧になりませんか。

男：全然、興味ないんです。

勧誘者：あ、そうですか。じゃ、必要無いですね。 (実話)

しかし、同じ推意が(2)のように言うことでも聞き手によって復元されうる。

(2) 全然、興味ありません。

そこで、本章では推意による伝達において、なぜノダが用いられるのか、ノダを用いる場合と用いない場合とでは推意の伝達にどのような違いが生じるのか、という点について考察を行い、結論として、「ある命題を『聞き手側から見た解釈として』提示することにより、『聞き手による推意前提の想定』をより強く制約する」機能が「推意のノダ」の機能であることを述べる。

### 6.1. 先行研究とその問題点

#### 6.1.1. 関連性理論における推意の位置づけ

Sperber and Wilson(1986a)(1995)では、伝達における重要な特徴の一つとして、「明示性(Explicitness)」を挙げ、以下のように定義している(p.182)。

(3) 「明示性(Explicitness)」<sup>2</sup>

<sup>1</sup> ここで言う「間接的」とは「疑問の焦点」に直接は合致していない回答・応答である、ということを示している。「疑問の焦点」を厳密に定義することは決して容易なことではないが、本書は「疑問の焦点」自体を論ずることを目的とするものではない。したがって、「質問者が最も入手したいと考えている情報」に該当する不定・未確定部分を「疑問の焦点」として暫定的に定義し考察を進める。但し、本書が「推意のノダ文」とみなすノダ文の中には先行発話が質問ではないものも存在するが、そのような場合も先行発話の話し手は何らかの「前提-焦点」という情報構造を意識していると思われる。

<sup>2</sup> 原文 Sperber and Wilson(1986a:182)では以下のようになっている。

#### Explicitness

An assumption communicated by an utterance U is explicit if and only if it is a development of a logical form encoded by U.

なお、Sperber and Wilson(1995)ではこの定義が厳格すぎると注釈がつけられている。具体的には「I tell you that P」や「P despite Q」という発話を行うことが「Pを明示的に伝達することになる」という事実を説明するよう修正されるべきである(引用邦訳 p.357)と述べられているが、修正された定義は提出されていない。但し、この問題は推意のノダにおける考察には直接関係しないと思われる。したがって、本書では「明示